

# 泉

若葉学習会専修学校報 No.647

2021 MAY



稲植えて顔も足も泥だらけ

でも心中は五月晴れ

米子校舎 中学2年 山本 隼輝

## 君たち 僕たち



米子校舎 小学5年  
北堀 陽大さん



倉吉校舎 中学1年  
里田 昌昭さん

「バカ勉強じゃないところがいい」と言われ、しばらく「？」が浮かんでいたところに、5年生の仲間たちが教えてくれました。「カリ勉強じゃないってこと」。なるほど今はそう言うのです。でもそれでよかったです。今までは計算ばかりしていたので、読む問題が苦手でした。それが若葉でできるようになりました。バカ勉強ではなくても効率よくがんばれているということですね。ありがとう。ホッとしました。

「若葉のない日は剣道の練習です」と言われ、二度目の「？」です。見た目で判断してはいけないことは重々承知していますが、華奢でスマートな雰囲気からは想像の外側でした。しかも鳥取県で1位になったことがある実力なのだから、さっそくネットで調べてみると確かに戦績が出てきます。本当に失礼しました。練習には週に3回通っています。「剣道は集中できる方がいいです。集中は勉強にも役立ちます」。なるほど、普段の礼儀正しいふるまいや、ていねいな発表は、そういうことだったのです。参りました。

(担当 佐布)

この四月から若葉に入學した小中学生のみなさんは、初めての授業日にテストを受けましたね。若葉ではそれを月例テストと呼ぶのですが、倉吉校舎内で数学が一番だった生徒を紹介します。昌昭君は小学六年から通学しています。きっかけはお姉ちゃんの明日香さんが通学していたからです。「明日香、昌昭」漢字に多く「日」をいれていると、以前にお母さんから名前のエピソードをお聞きしたことがあります。素敵な名前の由来です。素敵な名前、昌昭君！

昌昭君は小学校の頃から陸上競技をしていて、専門は「走り幅跳び」。新聞に名前が掲載されていて驚いたことがありました。若葉に小学校から通った良かったことは、苦手だった国語の読解問題ができるようになったこと。指導者である私も、彼が日に日に読解力がついて、できるようになったなど実感していました。そんな彼の目標は「高専合格」です。得意の数学を活かして、エンジニアになるのでしょうか。まだ中一、可能性は無限大です。来月も一番目指して頑張れ、昌昭君！

(担当 濱)

# 卒業生はいま!



鳥取県立中央病院医師  
藤田 綾乃 さん  
山陰労災病院医師  
竹田 未来 さん

office&campus



この春「若葉っ子」から二人の医師が誕生しました!鳥大医学部を卒業した藤田さんと竹田さんは、医師国家試験に合格し、四月から県内東西を代表する病院で医師としての第一歩を踏み出したのです。女医二人の豪華な取材です。

写真右が藤田さん。一見華やかなギャル?のような印象ですが、実は穏やかで優しいお姉さん気質。隠岐に住むお祖母様が医療を受けるのに不自由な姿を見て医師を志しました。常に患者さんや他の医療職の方々へのリスペクトを忘れない医師になりたいと望んでいます。

写真左が竹田さん。中学生の頃から誰からも好かれる存在で、周りには笑顔が絶えないマスコットのようなタイプ。医師を志したのは医大が自宅から近かったからだとか、医師になるのはあくまで生活の手段だとか言うのは、謙虚な彼女らしい照れ隠しのように思います。

二人は若葉で頑張っている中高生にメッセージをくれました。「やらずに後悔するよりは、やって後悔した方がいい。失敗も回り道も生きる力になります!」と藤田さん。「将来の選択肢を増やすために、やりたいことをやるために、少しでも頑張ってみよう!」と竹田さん。皆さん肝に銘じましょう。

楽しい取材で話が弾んだこともあり、元々記者とはそれぞれ時々会って話す仲であることもあり、この二人の「ネタ」はまだまだあります。二人が医師として活躍するようになってから、今度は一人ずつ取材し報告しようと思えます。立派な医師になるのは間違いありませんから。

(担当 門脇)

## 境港校舎から、こんにちは!新体制で指導します!



今年四月から境港校舎の職員が代わりました。三年間境港校舎の英語科を担当して下さった角先生が、今年度から米子校舎の専任になり、代わりに美柑先生が担当することになりました。美柑先生は、三十年以上も英語を指導されているということもあり、授業中の迫力は圧巻です。生徒への対応も丁寧で、私も見習うことが多いです。授業以外の清掃などの仕事も積極的で、改めて仕事への向き合い方を考えさせられました。昨年度の三年生は全員が県立高校に合格することができたので、今年度も美柑先生と一緒に今年の三年生を第一希望に合格させられるよう精進していきたいと思えます。

(担当 古徳)



## 学園NEWS

境港校舎

## 職員随想

### 断捨離

兼折 克典



昨年の七月に五年間住んだ安来市から松江市へと引っ越しをした。引っ越しを終えてからすでに半年以上が過ぎていくにもかかわらず、中身が分からない段ボール箱がいくつもある。こんな荷物、前のアパートのいったいどこに入っていたのかと思うほどである。引っ越し時にはとりあえず思い、押し入れや使っていない部屋に置いたのだが、未だに仮置き状態である。それでもと思い、休みの日を使って少しずつでも片付けていこうと思うのだが、疲れからのだるうか億劫になってしまい、毎回諦めてしまっている。前のアパートより部屋数を増やしたはずなのに、全くそれを感じられない物の多さ。これでは埒が明かないと思いつつ、「断捨離」をするしかないという考えにたどり着いた。

「断捨離」とは、不要な物を「断ち」、「捨て」、物への執着から「離れる」ことにより、「もつたない」という固定観念に凝り固まってしまう心を開放し、身軽で快適な生活と人生を手に入れようとする思想だそうである。はたして私はそんな思想を持ったことがあるだろうか。

いやいや私はなかなか物が捨てられない性格であり、もつたない精神が強い方である。ましてや今までの私は「断捨離」よりも片付けには「収納術」が大切だと思っていた。だから片付けをするために収納家具を増やしに増やし、さらに部屋を狭くしていた。そしてさらにいざという時の備えとして、洗剤やティッシュペーパーなどの生活雑貨を大量にストックしてしまっ癖がある。とにかく

物を溜め込むのが好きでしようがない。溜め込むと安心するし、少しでもなくなると不安を感じる。

こんな自分に断捨離などできるのか。断捨離をしたという友人にどうやったのか聞いてみることにした。結婚を機に断捨離を決意した友人は「使うかどうか」ではなく「必要かどうか」で判断し、結果的に部屋の中のほとんどを捨てることができたそうだ。捨てるのも全く困らなかつたというのだから、大成功なのだろう。私は何かを入れることができるのか、捨てる時に使えるという理由で紙袋やビニール袋も捨てずに溜め込んでいた。大きな袋に詰め込み、それだけでスペースを使ってしまった。友人に言わせれば「そんなものは論外」だそうである。いつか使うかとも思って取っておいたものは、だいたいわないまま。だから捨てればいい。捨ててもまた紙袋などはすぐに溜まってくるものだと教えられた。なるほどと思いつつも、そんな簡単に物を手放すことができないのかと思った。

そして四月になり、断捨離を執行することにした。といっても、できる範囲でという最初から弱気なモチベーションで始めた。まずは段ボールに入っている「服」から始めた。中にはまた着るかもと思って、何年も着ていない服がたくさんあった。さすがにこれらはもう着ないだろう。思い切つて服だけで三箱処分することにした。本当はもう少し処分できるはずだろうが、ちよつと怖くなってきてしまった。我が家は、服を処分しただけでは何も変わらない。部屋も広くならないし、見た目も変わらない。いったい何を処分すれば快適な生活が手に入るのか。悩むことに疲れ結局ここで終了となった。私の断捨離は今始まったばかりである。今年のゴールデンウィークはどうせコロナでどこにも行けないので、家族を巻き込んで第二回戦をやってみようと思う。果たして我が家は片付くのか?